

## お金に込められた愛情

福岡県・明治学園中学校 2年 渡邊 倫子

「ニガウリもたくさん持ってお帰り。」

畑からの帰り道。夏の日射しにジリジリ照りつけられ、また少し小さくなった83才の祖母と、祖母を見下ろすようになった私の影が並んで歩く。

「おばあちゃん、また来るよ。」

帰り際に声を掛けると、

「好きなだけ、勉強してね。」

まっすぐに私を見つめて、真っ白な封筒に入ったお金をそっと渡してくれる、しわくちあのやさしい手。そして、その後必ずその手を私の肩にそっと置く。

「みっちゃん、体が一番大事よ。無理をして体を壊したらいけんよ。」

「うん。ありがとう。」

私が物心ついた頃<sup>ころ</sup>から繰り返されてきた光景だ。しかし、私は今まで、この祖母の言葉や表情の奥に隠された本当の思いに、全く気付いていなかったのだ。

今年の夏休み、社会科の課題で戦争体験のレポートを書くことになった。そこで、私と同じ町で中学・高校生活を送った祖母に戦争の話を聞いた。

第二次世界大戦が激しさを増す昭和16年。祖母は両親と2人の姉と共に福岡県北九州市小倉に住んでいた。そして、「さあ、これで今からたくさん勉強が出来るぞ」と、張り切って旧制小倉高等女学校に入学した。しかし、1、2年時は、戦技訓練や救護訓練に明け暮れ、戦争で男手がない農家の手伝いをし、全く勉強は出来なかったという。

「何か悲惨なことがあったんじゃない？」

この私の質問には口を固く閉ざしてしまう祖母。しばらくしてポツリとつぶやく。

「死ぬことは、不思議なことじゃなくて、身近で当たり前だったねえ。だから、ちっとも恐ろしいとは思ってなかったんよ。」

どこか遠くを見ているような祖母の悲しげな目。私は、胸をキューツと締め

つけられた。

高等女学校の3年になると、小倉陸軍造兵廠<sup>ぞうへいしやう</sup>で、16ミリ機関砲を作る作業にあたったそうだ。

「えっ。長崎に落ちた原爆の、最初の投下目標地だった所でしょう。」

「空襲警報がしょっちゅう鳴っていてねえ。でも防空壕<sup>ぼうくうごう</sup>にも入らんで、皆、ノルマを達成するために、鉄粉と油まみれになって、必死で弾を削ったんよ。」

「敵の爆弾が降ってきて、友達と2人必死で逃げたんよ。そしたら不発弾で、助かって。」

時折声を詰まらせながら、しぼり出すように話す祖母。私は初めて聞く戦争体験に胸が詰まって苦しくなり、何度もその場から逃げ出したい衝動に駆られた。でも、祖母の真剣な目を見つめるうちに、「逃げたらいけない、真っ正面から、受け止めなくては」という思いに変わっていった。

戦争がさらに激しくなった昭和20年3月、祖母は高等女学校を卒業した。空襲で、途中で流れてしまった卒業式では、卒業証書と一緒に学徒動員証と35銭をもらい、胸が一杯になったという。

「結局、勉強はなあんも出来なかったね。あの時もらったお金も、どこにどうなったんか分からんのよ。」

楽しみにしていた勉強をしたくてもできず、命がけで働いて得たお金も、戦争中の混乱の中で、自分のために使うことができなかった青春時代。私は、はっと胸をつかれた。

「好きなだけ勉強してね。」

そう言って、祖母が差し出してくれていたお金の本当の意味と、その重さが、今ようやく分かった気がする。

「おばあちゃんが、どんな気持ちでお金をくれよったんか、初めて分かったよ。」  
母に話してみると意外な答えが返ってきた。

「そうね。みっちゃんも、やっと大人へのスタートラインに立ったんやね。そのお金、本当に活きた使い方が出来るまではって、お父さんが貯めてくれてるんよ。」

「えっ。」

戦後は、長年小学校教師として懸命に働いて貯めたお金を渡してくれた祖母。そして祖母の思いを受けとめて、私のために貯め続けてくれた両親。勉強をした

くてもできなかった祖母が私に託した夢と、深い愛情が、両親の愛情と一つに溶けあって、私に託されていたんだなあと思うと、胸がじいんとした。

活きたお金の使い方が出来る人間になるために、私はまだまだ多くのことを学ばなければならない。いや、好きなだけ学ぶことの出来る幸せをかみしめながら、力一杯学んでいこう。そして学びとった知恵を生かして、医師として世の中の人々に役立つ人間になりたい。これが私の夢だ。いつか、その対価として、私も自分の力でお金を頂ける日が来たら、今度は次の世代に伝えたい。お金に込められた祖母の思いと、思い切り学べる幸せを。

